琉球大学学術リポジトリ

『おもろさうし』における霊力の諸相と表現：霊力は不可視か

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2007-11-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 池宮, 正治, Ikemiya, Masaharu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2402

『おもろさうし』における霊力の諸相と表現

――霊力は不可視か――

池宮正治

おもろと沖縄学の父と言われる伊波普猷の後を受けて、戦後いちはやくおもろ研究を進めたのが仲原善忠だった。仲原は終戦から二年目、沖縄研究の衰退を恐れた民俗学者柳田国男の編集で出された『沖縄文化論叢』に、いち早く「セヂ（霊力）の信仰について」という、『おもろさうし』の核心の課題を正面から鋭く解析した論文を発表している。この時のこの論文は柳田の激賞を受けたといわれている。仲原はその後雑誌「文化沖縄」（後に「沖縄文化」）などに次々とおもろの注釈を発表し、後にそれらを『おもろ新釈』（一九五七年）にまとめている。その概説のなかで仲原は「せぢ」に代表される霊力について、はじめて「不可視の霊力」と規定している。つまり『おもろさうし』にいくつも見られる霊力は実は目に見えない不可思議な霊的力のことであるとしているのである。おもろのセヂのイメージについて、批判的に正面から論じた論文を筆者は寡聞にして聞かない。本論はそうした現状にかんがみ、おもろの霊力研究の進展を願って、初歩的な段階ではあるが、私なりの提案をすることにした。

仲原以後のおもろ研究にはめざましいものがある。仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』、同『おもろさうし辞典・総索引』や、外間守善による岩波書店思想大系の『おもろさうし』、岩波文庫本の『おもろさうし』上下などが世に出、最近になっても波照間永吉の『定本おもろさうし』が出版され、『おもろさうし』研究の基盤の

整備と普及が図られるとともに研究も着実に深化したと思われる。本稿ではこれらの基礎研究を踏まえつつ『おもろさうし』の核心部分の一つであるいわゆる「霊力」について、その概略を述べつつ本稿の主題を追考することにする。

一、　せい、せ、すへ、すゑ、しひ、せぢ

ここに挙げたものは『おもろさうし』のなかの霊力の一つで、もとは漢語の「精」から出たと思われるものの異表記を集めたものである。この漢語の「精」には、たましいの意や、不思議な力をもつものの意がある。この「せい」から「い」が脱落したものが「せ」である。おもろにはｅやｉやａにつく「い」が脱落する傾向がある。「すへ」と「しひ」はｓｉｉやｓｈｉｉをあらわしたものである（ただしｓｉ音やｚｉ音がこの時期にあったかどうか今後の課題である）。「せぢ」は「せいぢ」から出たもので、漢字に直せば「精地」になる。「地」は一種の添え字とも、精という霊力の基底という意味のことばともとれるものである。巻十二の五のおもろ、

一　きこゑあおりやへや（聞こえあおりやへ神女は）
　　せぢまさて　おれわちへ（セヂ勝って降りたまいて）
　　世もつせぢ（世を保つセヂを）
　　あぢおそいに　みおやせ（按司襲い王に奉れ）
又　とよむくにもりや（鳴響む国守り＝国王は）
　　けおそわて　おれわちへ（怪生＝霊力　備わって降りたまいて）

又　さしぶなおさ　とりよわちへ（差し者（憑依者）に降り変わって）
　おぼつだけ　おき（や）つめ（おぼつ嶽（の神の）お掴み＝ご加護）
又　きらなおさ　とりよわちへ（綺羅直さ＝吉日を取りたまいて）
　かぐらたけ　おき（やつめ）（かぐら嶽のご加護）
又　きみてづり　めづらしや（君手摺り　珍しと）
　せぢまさて　おれわちへ（霊力優れて降りたまいて）
又　みものあすび　めづらしや（見事な神遊び　すばらしく）
　せぢまさて　おれよわちへ（霊力優れて降りたまいて）
又　あぢおそいや　いみやからど（按司おそい＝王は今からこそ）
又　せぢまさて　ちよわれ（霊力優れてましませ）

一の十七のおもろ、
一　きこゑ大きみぎや（聞こえた大君が）
　せぢとよみせいくさ（セヂ豊かな勢軍）
　しまうちのとよみ（島中の騒動）
又　とよむせだかこが（鳴響む勢高子が）
　せぢとよみせいくさ（精地豊かな勢軍）
又　きこゑあんじおそいぎや（聞こえた按司襲い＝王が）

せぢとよみいくさ（精地鳴響む軍）
又　とよむあんじおそいぎや（鳴響む按司襲いが）
せぢとよみいくさ（精地鳴響む軍）
又　ゑそこ　かよわぎやめ（斎底＝船がかようまで）
せぢ　やりやり　おそう（セヂ遣り遣り守らん）
又　みおうね　かよわぎやめ（み御船が通うまで）
せぢやりやり　おそは（セヂ遣り遣り守らん）
又　せいくさ　おしたてば（勢軍を押し立てると）
けおやりやりまぶら（霊力を遣りに遣って守ろう）
又　せひやく　おしたてば（勢火矢子　押し立てると）
けおやりやり　まぶら（霊力を遣りに遣って守ろう）
又　だしちや　うちくぎ（ダシチャの打ち釘を）
ちやはれ　まわらし（ひたすらまわして）

注　「せいくさ」「せひやく」の「せ」は当面軍勢の「勢」と考えておく。

このおもろの最後の二行は、真珠湊の竣工を記念して建てられた「真珠湊碑文」（一五二二年）にも「だしきやくぎ　つさしよわちへ、あさかがね　とどめわちへ」とあって、ダシチャ木の木釘を打って工事の落成としたとある。なおここの「だしちや」は方言名ダシチャで和名シマミサオノキという（天野鉄夫『琉球列島植物方言集』）。とすればこのおもろも何かの竣工式のおもろであるかも知れない。おもろの内容から推し量れば、王府官船の一つ

「せやりとみ」（勢遣り富）の竣工とみられる。十二の八四のおもろ、

一　きこゑ大きみぎや（聞得大君が）
　すへ　ゑらびやり　おれわちへ（精を選んで、降りたまいて）
　あんじおそいしゆ（按司おそい＝王こそ）
　きみ　ほこて　ちよわれ（君なる神女を誇ってましませ）
又　とよむせだかこが（鳴響む精高子神女が）
　ませねがて　おれわちへ（真精を願って降りたまい）
又　いけなきみ　よりおろちへ（この世の君に依りおろして）
又　なりきよきみ　つきおろちへ（成り子君に付きおろして）
又　きみきみむ　ほこて（君君も喜び）
又　かみがみむ　ほこて（神々も喜び）
又　あがまぶるおぢおそい（我等が護る按司襲い王）
又　てにが下（天の下）
　いとかけて　ちよわれ（糸を掛けまわして統治ましませ）

このおもろは尚永王の六（一五七八）年十月十五日の「君手擦りの百果報事」の時のおもろで、「精選びやりおれわちへ」と天上から地上の祭場に降り立つ表現を取っている。この「おれわちへ」は、本土古語の「あもる」

に似ていて、天降りするという幻視をともないつつ、国王や上級の神女たちが森嶽に現れる、出席する、つまり王や王妃について言えば、行幸行啓するという敬意をともなう表現でもある。主催の上級神女は神がかることもなく、職能的な「さしぶ」や「もづき」に「おれかわて」あるいは「おれなおちへ」役割を果たすのである。この「さしぶ」や「もづき」こそ上級の神女に代わって、霊力をおぎおろす専門の神女であることをおもろは明かしている。

二、けい、け、けお、けを、けう、けふ、きやう、きや

右の並びで考えると、もとの形は「けい」ということになる。「けい」は「怪異」からでたことばで「怪しいこと」「不思議なこと」の意である。兼好の「徒然草」にも「重き怪異なりとて云々」とある「怪異」である。この「けい」から例によって「い」が脱落して「け」となったのが右に挙げた「け」だと考えられる。ただし「け」(怪、恠)は「物のケ」のケのように単独でも使われているので、必ずしも脱落説を言う必要はあるまい。「けふ」「けお」「けを」「けう」は「キウ」や「キュー」に近い発音だと思われ、つまり同音の異表記である。「けふ」の「ふ」はしばふ(芝生)、よもぎふ(蓬生)などの「ふ」で、ものの集まる意がある。「きやう」も「けふ」から変化して「キョー」、「きや」は「きやう」から「う」が脱落し「キャ」と発音したことだろう。

首里城の南西隅に展開する王国第一の聖域「京の内」の「京」は全くの当て字で、上に述べたように霊力の「けふ」が同様に発音されたために「京」に宛られただけのもので、京都の「京」とは何の連絡もない。「きや」は上の「きやう」の「う」脱落したものである。

京の内の「うち」は皇居の内裏をもいうが、琉球でも正殿の後背域を「うち」また「なか」といった。これは王の政治行政向きをいう「おもて」に対するものである。そのほか各地の聖域にも、京の内の「内」のように「うち」

といっている。巻一の三六のおもろ、

一　あんじおそいや（按司襲い＝王は）
　金うちに　ちよわれ（黄金内＝京の内にこられて）
　世のさうせ　しよわれ（世の左右せ＝政をなさるので）
　大きみす　けい　やりよわれ（大君神女こそ（王に）怪異＝霊力を遣りたまえ）

又　あんじおそいや（按司襲い＝王は）
　けおのうちに　ちよわちへ（京の内に来たまいて）
　世のさうせ　しよわちへ（政治を執り行いたまいて）
　せだかこす　けい　やりよわめ（精高子神女こそ怪異を遣わしたまえ）

又　あんじおそいや（按司襲い＝王は）
　おぎもうちは　なげくな（御心中は　嘆くな）
　大きみす　けい　やりよわれ（大君こそ怪異を遣りたまう）

又　たたみきよは（尊び子＝王は）
　あよがうちは　なげくな（心中は嘆くな）

又　首里もり大ごろが（首里森の大子等＝兵士らが）
　しま　ひろく　そへて（島を広く平らげて）
　あんじおそいに（按司襲い＝王に）

世そへて　みおやせ（整備してさしあげよ）

又　みしまかずころころ（三島＝首里中の兵どもが）

国　ひろく　そへて（国を広く平定して）

又　きみはゑが（君南風が）

みやこしまはちへ　おわれ（ば）（宮古島に走って行かれると）

しまひろく　そへて（島広く添えて）

又　けおのしよが（怪生の主が）

やへましま　はちへ　おわちへ（八重山島に走っていらして）

くにひろく　そゑて（国広く添えて）

又　やゑましまいつこ（八重山の兵士）

あせら　ためやらは（吾兄ら＝兵士が抵抗するなら）

大きみすよしらめ（大君こそ攻めよう）

又　果たらしまくはら（果てのしまの子ら＝兵士）

ちかわ　ためやらは（地下人を矯めやると）

せたかこす　よしらめ（精高子神女こそ支配せよ）

又　あせら　ためやらは（吾兄ら＝兵士が抵抗するなら）

おきなます　もらん（沖膾にこそ盛らん）

大きみす　よしらめ（大君こそ寄せよう）

三、つつ、せび

「つつ」は『おもろさうし』に二例出ている。巻十三の四二の「つつ」をこれまで「霊力。神霊」としてきているが、この語は和船の中央に立てる帆柱を受ける凹形の柱のことで、この下に船の守り神である船霊を安置する例だった。琉球の船の民俗にも同様のものがあったことがこのおもろで伺えるのである。近世には琉球の唐船の船尾舳屋にマソを祭ることも知られている。母屋には、その他関帝王などを収め、船上には、七つ星旗、五色旗、ムカデ旗、日の丸旗など航海の不安を打ち消す装置が翻っていた。十三の四二、

一　きこへせのきみと（聞こえせの君神女と）
　　つつ　とりきやわちへ（船霊を取り交わして）
又　とよむせのきみと（鳴響むせのきみ神女と）
又　せのきみがおうねや（せの君神女が守る御船は）
　　わしがまやいとみ（鷲が舞会い富＝船号）
又　あじおそいがおうねや（按司襲い王の御船は）
　　げらへしまうちとみ（立派な島打ち富）
又　わしがまやいとみ（鷲が舞会い富と）
　　げらへしまうちとみと（立派な島打ち富と）

とある。「とりきやわちへ」は新旧の舟玉を取り変へて霊力を更新する意であろう。おもろのなかの「鷲が舞合い

富」と「島打ち富」は王府官船の名である。つぎの同巻二二二番のおもろにみられる「つつ」も同様の霊力である。

一　おくと　まう　おにわし（沖渡に舞う鬼鷲）
　　つつがうゑ　つかい（帆柱の上に止まって使い）
　あんまぶて（われらを守って）
　このと　わたしよわれ（この海を〈無事に〉渡したまえ）
又　となか　まう　おにわし（沖海に舞う鬼鷲）
　　せびがうへ　つかい（蟬〈帆柱上の滑車＝帆柱〉の上にとまって使い）

ここでいう鬼鷲は魚を捕食するミサゴであろう。唐船の艫には羽を広げた大きな鷲の図が描かれていた。舳先には虎面、鳥眼が描かれる。目的地へまっしぐらに到達する願意の表徴である。

四、つじや、つぢやこ、つじやこがね、つじやこのいし、つぢやのたま　つぢやこのまがね、

ここの「つじや」は、四国・中国・九州地方で粒のことを「つず」ということばと同じで、これに子称辞アが付いたものである。十三の十七には「たまゑれい　つじやゑれいおなりあんじ」（珠をもらえ、粒をもらえ　姉妹按司よ）とあり、「たま」と「つじや」が対語として使われている。「つぢやこ」はこの「つじや」にさらに接尾語「こ」がついて「つじやこ」となったもので、「つじやこの―いし」や「―まがね」「―たま」とあるように、これらはその材質や形状を表している。つまり神女の、勾玉を中心にした首輪や両手首にまく手玉のことを指している

のであろう。その「いし」は宝石や奇石であろうし、「まがね」は金銀といった貴金属の玉であろう。なお「たま」のなかには真珠も含まれよう（『真珠湊碑文』）。

珠と言えば『古事記』の「五百津（いほつ）の御統（みすまる）の珠」を想起するが、古来珠は魂の象徴でもあり、糸に貫いて多くの人々の心を集めまとめる意味があった。おもろにみられる珠にもおそらくはそうした霊能を認め、その輝きが霊力の発現と認識されていたように思われる。十三の二一三のおもろ、

一　ゑらぶむすびよもへ（永良部結び思い＝人名）
　くれるてや　なちやな（暮れかかってしまったか）
　いみやこより（今より）
　めづらごゑ　やらに（珍ら声　遣ろう）

又　たびだつあんや（旅立つ我は）

又　なつたなしやれば（夏の手なし＝筒袖の普段着なので）
　はだからむ　さわらん（肌にも障らない）

又　つじやのたまやれば（粒の珠なので）
　くびからむ　さわらん（首にも障らない）

十五の六のおもろ、

一　たくしたらなづけてだよ（沢岻太郎名付けテダよ）

つじやこのいしとかねとやに（粒の石の金とのように）
てだ　しひ　つかば（テダ精が付くと）
とのす　世はちよわれ（殿こそ　（いつまでも）この世にましませ）
又　よかるたらなづけ（てだよ）（良くある太郎名付けテダよ）

ここの沢岻太郎名付けは一五二二年に建立した「真珠湊碑文」に三司官の一人として名が出ている人物で「たるかねもい　たくしの大やくもい」その人である。唐名は毛文英、名は盛里。「たらなつけ」というのは尚清王の名付け親だったからといわれる。尚真王の大永二（一五二二）年中国に使いし、翌年今に残る瑞泉のあの龍頭や、国王の渡御に使われる輿（塔御轎）をもたらした人ともいわれている。一五二五年「王舅達魯加禰国柱大人寿蔵之銘」が建立されその功績が讃えられている。この年に亡くなったのだろう。

おもろは、珠粒の石と金の輝きのようなテダ精が着いたので、沢岻が長生きするのだと歌われている。

ところで「辞典・総索引」は、ここの「つじやこのいし」を「磁石の石」とし、十三の二二四「つしやこかね」にも「（磁石金）磁性を持った金（かね）の意で磁鉄鉱をさすようである。久米島仲里村島尻に産した」と記している。さらに文庫本には本文の「つじやこかね」に「粒子金」を宛てながら「磁性を持った金（かね）の意。磁鉄鉱をさすようである。久米島に産した」と従来の注をくりかえしている。これらの「つじやこ」はおもろ全体から見て、やはり珠を意味する粒子と解すべきもので、磁石説は認めがたい。これでは珠粒の石と金のそれの輝きのようにテダの精がつくという、このおもろのもっとも核心の理解がまったく霞んでしまう。この珠粒の光や輝きにこそテダ精という視覚的な霊力を認め、そのマジカル・パワーで「殿す世はちよわれ」と予祝し、長寿を祝福してい

るのである。

五、もの、もづき、むづき、さしぶ

「もの」は「物の怪」に代表されるように、デモーニッシュなものの代表的な存在である。しかし、おもろには必ずしも多いとは言えない。僅かに「むづき」と「もづき」しかない。この「む」と「も」は「もの」からの変化で神仏や魂魄のほか下級の霊妙なモノをさす。モノに憑かれることを、那覇でムンニウサーリーン（物に襲われる）とか、ムンニムタリーン（物に持たれる）という。おもろの「もづき」と「むづき」は、モノが憑いた人の意になる。対語は「さしぶ」で、これはモノが差した者の意で、太陽由来の霊力が刺し入った者のニュアンスがある。いずれにしても神霊が憑依した神女のことである。巻三の七のおもろ、

（前略）

一　きこゑ大きみぎや（聞得大君が）
　　とよむせだかこが（鳴響む精高子が）
又　さしぶ　おれふさて（差し者神女に降り相応いて）
　　むづき　おれなおちへ（物付き神女に降り直して）

（後略）

おもろは、霊力が神女の体に上から差し入ったり付いたりするというものである。「ふさて」は「ふさいて」で、

ふさわしい、フィットしているという意味になる。似合う、調和する、ふさわしいというのは、王を含む身分の高い者に対する賛美の表現の一つであって（拙稿「おもろの表現ー適合調和する讃歌ー」琉球大学法文学部紀要『日本東洋文化論集』10号　二〇〇四年三月）、「おれなおちへ」ということばは、聞得大君やせんきみ、さすかさといった高級神女に代って、より専門的な霊能者である「さしぶ」「むづき」に憑依する意である。「さしぶ」は差す者、霊力が差し入った者、「むづき」は、すでに述べたように霊力（もの）が寄り付いた者の意である。

「もの」と呼ばれる霊妙な力を持ったものが認められる。それが付いた者のことを「もづき」＝「むづき」という。そうした霊能を持った者をさしていうのである。その対語が「さしぶ」で、霊が差し入った者の意ということになる。この「さしぶ」の「ぶ」は「もの」からの変化である。「まもの」は国王などの身分の高い人に使われる。民間では物に憑かれたり、襲われたりする例が多いのだが、おもろにはそうしたモノは意外に少ない。五の五八のおもろ、

一　つるこにくげしや（鶴子憎げさ）
　よかるにくげしや（良くある憎げさ）
　みやがのとり（冥加の鳥である）
　みやがのわし（冥加の鷲）

又　なかべ　まうとりや（中辺＝中空に舞う鳥は）
　くもべ　まうとりや（雲辺に舞う鳥は）

又　とりむ　物｜　しると（鳥も物知ると）

わしも　物　しると（鷲も物知ると）
又　くめは　いなへやり（久米は早すぎて）
けらま　まいこゑて（慶良間も舞い越えて）

ここの「みやがのとり」を冥加の鳥としてみた。冥加というのは知らず知らずのうちに神仏の加護を受けることをいうが、当時の琉球は仏教国でもあり、マソを含む多くの神仏にすがったので、鳥や鷲は船人にとっては冥加と写ったとしても不思議はない。「物知り」は単なる知識が豊かという意味ではあるまい。奄美沖縄では占いなどに関与する「物知り」がいて、霊的なモノを呼び出したり判定したりする。これは物の怪の「物」にも通じることばだと思われる。上のおもろは、鳥も鷲も物知ると歌うが、古琉球でも鳥は霊魂の運搬者として船を守護するものと考えられていたのではないだろうか。久米を経由して慶良間を舞い越えて那覇に向かう鳥＝船とは、中国から帰国する渡唐船であろう。

六、しけ、しけかけ、ましけず＝ましけづ、しけうち、しけち、しけちもり、しけちなわ、しけており

ここに挙げた「しけ」関連の語のうち、神前に備える神酒を意味する「しげち」のほかはだいたいのところ「しけ」と読むらしい。『琉球国由来記』十三の三七八、玉城間切志堅原のイリノ嶽の神名「敷地カナマンノ御イベ」のこの「敷地」は「しけち」あるいは「しけうち」であろう。同中城間切伊集和宇慶村のシキマタノ嶽の神名「シキ森ノセジ御イベ」とある「シキ」、このふたつの「シキ」も「辞典・総索引」にある「聖所。神の在所。『聖なる』の意の美称辞ということになろう。「聖所」や「聖なる」のことばが日本や琉球のこうした場所をいうことばとし

てはなかなかあてはめがたいが、聖と俗を区画するいわば結界として「糸」や「縄」とともに「しけ」がかけまわされたのだとすれば、理解するにかたくない。それ故こうした聖域に奉仕する神女を「しけかけのかみにしや」「しけかけののろ」といい、その場所つまり聖域を「いとかけのまみや」「なわかけのまみや」とある章句の例とも矛盾しない。しかしこの他の「しけ」や「ましけ」は霊力の一種であるらしい。巻十の三三のおもろ、

一　きこゑおにのきみ（聞こえ鬼の君）
　　ゑ　やれ　しく（ヱ　ヤレ　頻りに）
　　しけ　かけて　こがせ（シケ（霊力）かけて漕がせよ）

又　とよむおにのきみ（鳴響む鬼の君）

又　あさどれが　しよれば（朝凪がすると）

又　ようどれが　しよれば（夕凪がすると）

又　いたきよらは　おしうけて（板美ら＝船を押し浮けて）

又　たなきよらは　おしうけて（棚美ら＝船を押し浮けて）

又　ふなこゑらで　のせて（舟子を選んで乗せて）

又　てかぢゑらで　のせて（手舵＝船員を選んで乗せて）

航海安全の霊力のある「シケ」をもって願掛けし、そのシケの力で航海の安全を祈っている。巻十三の五一のおもろ、

一　おわもりが（オワモリ神女が）
　　けおのきみ　あまへて（怪生の君と喜んで）
　　ぶれまて　はりやしよわ（群れ舞いて＝喜んで走らせたまえ）
又　たまておりや（玉の手折り＝踊り手）
　　しけておりや（シケのついた踊り手）
又　おしうけわちへ（〈船を〉押し浮けたまいて）
　　くりうけわちへ（〈船を〉刳り浮けたまいて）

ここの「ており」は手折りで、手踊りをする意であるが、官船「手折り富」の航海を祝福しているのである。「たま」と「しけ」が対で使われている。「たま」は美称辞でもあり、霊力の象徴でもある。ということは「しけ」にも同様の内実が揺曳していたものと考えてよいのではないだろうか。

七、東方に「とよむ」日と月ー照り輝く霊力

「とよむ」ということばは、おもろでは、国王を初めとするテダ的な人物や神女に冠せられることが多い。あるいは地名にも冠せられる。これは「有名な」とか「名高い」と意訳されるが、原意は山内盛熹の「南島八重垣」にあるように、日や月が光を放って差し昇ることでもある。月は太陽に比べてさすがに少ないが、巻七の六のおもろ、

一　きこゑせぢあらきみ（聞こえたセヂ荒い君＝神女）

あがるいに　とよむ（東方に照る）
きくやなきたけから（キクヤナキ嶽の方から）
あがておわる月しゆ（上がってこられる月こそ）
しよりもり　ちよわる（首里森におられる）
あがたたみがなししゆ（我等が尊い御方さま（王）こそ）
まだに　やびきよわちへ（確かに　影引きたまいて）
又　とよむせぢあらきみ（鳴響むセヂ荒い君）

「とよむ」の多くは人について、名前や名声がとどろく意であるが、なかには次のようなものもある。巻二の十一、

一　中ぐすくあつる（中城にある）
うらとよむつづみ（浦鳴響む鼓）
うちちへ　なりあがらせ（打って鳴りあがらせ）
又　とよむくに　あつる（鳴響む国にある）

ここの「とよむ」は村々に鼓を鳴り響かせる意味にとってもよさそうである。宮古でも家内から聞こえる大きな音をヤー・トゥユン（家とよむ）というよしで、ここの例に近い。これで「とよむ」が聴覚でも視覚でも表現されていることがわかる。琉歌に、

とよむ中城吉の浦のお月　み影照りわたてさびやないさめ

という古歌もある。ここの「とよむ」は「月」にかかり、月の光がこうこうと照るさまをいっている。吉の浦は月の名所である。また幻の組踊に「月の豊た」というのもある。特に日の出の「とよむ」のなかには霊力の発現をふくむものが多いことに留意する必要がある。三の七五のおもろ、

一　あがるいの大ぬし（東方の大主）
　ふゑのとりの　かこへの（日の鳥の佳声の）
　うらうらと　きき　きよらや（うららかに聞いてすばらしい）

又　てだがあなの大ぬし（太陽の穴の大主）

東の空からさし昇る太陽に神性を認め、畏敬の念をこめて大主と呼び、火の鳥の佳声さえ聞いている。その声はうららかに聞こえてすばらしいと、讃える。同巻の八〇にも、

一　あがるいの大ぬし（東方の大主）
　あけまもどろ　みれば（夜明け前のもどろを見ると）
　べにのとりの　まやへ　みもん（紅の鳥の舞合い、見物）

又　てだがあなの大ぬし（テダの穴の大主）

とある。朝日がいましものぼろうとする東天に差す光が「あけまもどろ」つまり夜明け前の「もどろ」（陽光）である。この「もどろ」は目も眩むような光景をいうもので、本土語の「もどろく」の語幹に近い。目がくらむのである。あの紅蓮のほむらのなかに鳳凰の飛翔する姿をイメージしたものらしいのである。

おもろ人は誕生したばかりの陽光に神聖な力を感じ、それが霊力となって身に降り注ぐとも考えたらしい。古琉球期の碑文の碑頭を飾る日輪鳳凰紋やノロ扇の日輪鳳凰紋はこの思想を図案化したもので、ビンヌトゥイ（紅の鳥）と言っている。要するに神女の持つ日輪鳳凰紋の扇は航海安全と豊穣を願い、テダなる国王の長寿延命を祈念する図柄になっていると思われるのである。神女自身は、『混効験集』の序文にもあるように、その本地は弁才天だと考えられていた。弁才天はもともとのインドでは河の神だったために、転じて航海や天候を支配する神と考えられ、天候や航海の守護神ともなったのである。巻四の三のおもろには、神女が、

（前略）
せぢまさて　あすべば（セヂ勝って神遊びすると）
てるかはが　てりよるやに　きよらや（テルカワ＝日神が照るように見事だ）
（後略）

と歌われる。テルカワは東天の旭日でもあり、セヂの根源でもある。神女の奉仕する森嶽に陽光が降り注いでセヂを満たすことが「きよらや」という感嘆のことばである。空間に陽光が「照る」かたちでセヂが感得されているのである。同巻の六に、

きこゑあおりやへや（聞こえアオリヤへ神女が）
しけうちあや　かけわちへ（聖域に綾なる霊力をかけたまいて）
ちよらのはなの　さいわたる　みもん（美しい花（陽光）が咲渡る　見事さ）

「しけうち」なる聖域に朝日由来の美しい霊力をかけ渡すのである。曙光は美しい花が咲渡るとイメージされ、それを見事な光景として感嘆している。これらは良い結果を期待する予祝歌の特色でもある。

同巻の八のおもろを見てみる。

あがるいのこがねあな（東方の黄金穴から）
こがねはなの　さきよれば（黄金の花が咲くと）
あおりやゑや（あおりやえ神女は）
おれよ　みぎや　おれわちへ（それを見に来られて）

太陽は東方の黄金穴から生まれ、霊力を逓減させながら西のテダの穴に沈み、太地の闇のわたなかで再生して東方のこがね穴から昇天する。生まれたばかりの朝日は最も瑞々しく、それだけにもっとも強い霊力を発散しつつ差し昇る。アオリヤへ神女は、霊力の充満した黄金の花のような陽光を浴びて、霊力を増すのである。例えば巻七の三六にある「こがねすへ」（黄金精）も霊力の視覚的表現だが、この例は集中多くの例がある。巻三の九に、

（前略）

又　あからせぢ　おるちへ（赤いセヂを降ろして）

まへぶしやよ　まよわちへ（ま武者を迷わして）

又　ひぢゑるせぢ　おるちへ（火出るセヂをおろして）

おかすきやよ　ゆこちへ（侵す者たちをだまして）

（後略）

これまで見てきたように、霊力の根源の主要なものの一つが太陽で、それも東方の黄金穴から今しも生まれたばかりのみづみづしいものでなければならなかった。巻十の二一に「あがるいのみづかわ」「てだがあなのみづかわ」とあるように、東方のテダが穴から生まれたばかりの、生命力豊かな朝日と曙光、これが「瑞々しい日（太陽）」であり「日の穴の瑞々しい日（太陽）」なのである。頭上のテダは強いひざしとなって降り注ぐが、朝の陽光にくらべて霊力が豊かとは認識されていなかったのである。ここの「赤らセヂ」はその朝日そのものから放射発散される霊力そのものである。霊力の一つである「せい（精）」の異表記である「こがねすへ」「こがねすゑ」「こがねせひ」がついたものもそうした霊力である。巻五の四二のおもろ、

一　あかわりぎや　おもろ（アカワリ神女のおもろは）

くちまさしや　あもの（口正しくあるので）

とももと（十百年＝千年＝いつまでも）

おがで　かがおらに（〈王のお顔を〉拝見して輝いていたい）

又　としのはじまりに（年の始まり）

（下略）

アカワリ神女がおもろを歌うことで、歌う神女の口から発するおもろは口まさしく霊力を発揮するのである。「かがおらに」は霊力を輝かしていようという意味である。もはやこれ以上例を示すに及ばないだろう。おもろにはさまざまな霊力があり、それらはそれぞれ鮮やかに視覚的にとらえられていたのである。仲原善忠が指摘した「不可視の霊力」は、上に例示しるる述べたように、鮮やかに見えるものとして多くのおもろに歌われていることは誰の目にも明らかである。

最後に次の一首をあげて本論を閉じることにしよう。巻七の三六のおもろ、

一　わかさあしときや（若さがあった時には）
　たまきや　ゑらで　さちや物（珠纏きの太刀を選んで差したものを）
　ひやくさ　なてからは（百歳になったからには）
　こがねすへ　つきやり（〈身に〉黄金の精がつき）
　御まへ　かがおらに（〈王の〉御前に輝いて居よう）

又　わかさ　あしときや（若かったころには）
　よろい　ゑらで　さちや物（鎧を選んで着たものを）

このおもろは、生まれたての東天の曙光にのみ霊力が充満しているのではないことを示している。長寿者には長寿者だけがもつ「ひゃくさせぢ」（百歳セヂ）や「黄金精」が認められ、これを王の御前に出て発揮することで王の長寿を予祝するのである。ここには長寿に対する希望と畏敬それに尊敬がその根底にあって、その類稀な生命力に対して百歳セヂという霊力を感得したのである。なおこのセヂも「かがおらに」とあるように、視覚的に捉えられる霊力である。

主要参考文献

仲原善忠『おもろ新釈』一九五七年
仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引』一九六七年
外間守善・西郷信綱『おもろさうし』（日本思想大系一八）一九七二年
外間守善『おもろさうし』上下（岩波文庫）二〇〇〇年

補　記

前号に発表した拙稿「琉球国王の神号と『おもろさうし』」のなかで、尚寧と尚永はたえず並立して登場する異例の政権であったらしいことを述べ、奄美おもろが地方おもろにではなく、外洋関係のおもろを集めた巻十三に収められているのは、島津入り後の現実を反映しているのではないかと述べておいた。これを全面的に改める必要はないが、各巻の表題をのせた『おもろさうし』巻一の冒頭の「おもろ御さうし目録」の巻五、巻七、巻八、巻九、巻十五、巻十六、巻十八の各巻の表紙の表題の右肩には、共通して尚豊王の神名「首里天ぎやすへあんじおそいがなし」とある。当該の各巻にも同様にある。他の国王についてはこうした神名はいっさいない。ということは、尚

寧王の後を受けた尚豊王の時に『おもろさうし』の編集が一応完了・成立し、これが一七〇九年の王城火災のさい焼失したものと思われる。尚豊の神名が七冊にしかないのは、その後の『おもろさうし』の過酷な保存状況や、現在の『おもろさうし』の錯簡・重複など編集上の混乱を説明することにもなるであろう。これも今後の課題である。